

特集：図書館のよりよい環境づくり—音

図書館における音環境のあり方

岩宮 眞一郎

1. 図書館も音で満ちている

コンビニエンスストアは、音で満ちている。この文は、第15回芥川賞を受賞した村田沙耶香さんの「コンビニ人間」の最初の文章である。このあと、この小説はコンビニの音環境の詳細な描写が続く。チャイムの音、宣伝の放送、バーコードのスキヤン音、パンの袋の音、客の足音などの音が混じり合い「コンビニの音」となって主人公の鼓膜に届くことが語られたあと、コンビニ店員である主人公の一日が始まる。

別にコンビニでなくても、我々の日常はさまざまな音で満ちあふれている。我々の生活環境は、普段そんなに意識はされないが、多くの音が鳴り響いている。生活空間にあふれる音は、心地よい音だけでなく、人を不快にさせる音もある。鳴ってはいても、ほとんど意識にのぼらない音も多い。

図書館は、どうだろう。図書館というと「静かな」空間というイメージが強いが、まったく無音という訳ではない。加藤（1997）が1996年に行った11都道府県の公立図書館772館を対象とした調査によると、図書館内から聞こえる音として、話し声、子供の声、足音、ページをめくる音、イスや机を動かす音、コピー機の音、電話のベルの音、テレホンカードの返却音、タイプライタの音、コンピュータ端末の音、プリンタの音、電卓の音、パソコンの音、空調の吹き出し音、エレベータのモータ音などが上げられている。さらに、図書館外の音として、自動車走行音、航空機の音、電車の音、警笛、サイレン、工場の音、工事の音、雨の音、風の音、鳥の鳴き声、動物の鳴き声、人の声、音楽、鐘の音などが上げられている。この結果は、図書館の運営サイドへのアンケートによるものなので図書館で聞こえる音がすべて網羅され

ている訳ではないし、また20年以上前の調査なので現在の状況とは異なっているが、図書館も多様な「音で満ちている」ことが分かる。

普段あまり意識されない存在かもしれないが、図書館で聞こえる音について着目してみたい。また、今日では図書館もおしゃれな空間になっていたり、単に本を読んだり借りたりの場ではなく、地域交流の場になっていたりする。取り巻く環境の変化の中で、図書館における理想の音環境とはどのようなものであるのか、またどのようなべきなのかを図書館の音環境に関する研究等を参考にしながら考えてみたい。

2. 「静かな図書館」は望ましい音環境なのか？

加藤の調査では、図書館として望ましい音環境に関して、「静かな環境」「ある程度音のある環境」「にぎやかな環境」のうちから選択する方法で各図書館に尋ねている。その結果、「静かな環境」を選択した図書館は71.2%にのぼったが、「ある程度音のある環境」を選択した図書館も27.2%あった。やはり図書館の音環境としては、基本的には静寂な環境が望まれているようであるが、ある程度の音は許容しようというのが実態であろう。

同時に調査されている図書館内の音環境に対する調査結果でも、「静かである」と回答した図書館が62.5%あり、多くの図書館では望ましい環境を提供していると自負しているようである。ただし、「どちらかというとならぬ騒がしい」との回答が27.3%あり、これに「騒がしい」「非常に騒がしい」との回答を加えると31.6%になることから、必ずしも理想どおりの環境を提供できていないと感じている図書館も相当数存在するようである。

これと同様の調査を、加藤の調査から20年後の2017年に伊藤（2018）が行っている。調査対象は